

「韓国」「朝鮮」と日本

いま朝鮮半島には、南に大韓民国、北に朝鮮民主主義人民共和国という二つの国があります。もともと一つの民族、国家がありました。それが、朝鮮ほんらいの姿です。

自分たちの意志ではなく外部の勢力の都合で二つに分裂させられ、おたがいにいがみあうのはやめよう、朝鮮が二つの国に分かれているのは不自然だ、自分たちの力でもとの姿にもどそう、と誓い合ったところに、二〇〇〇年六月の「南北共同宣言」の最も大きな意味がありました。

日本の国は、明治のはじめから、「征韓論」に基づく朝鮮侵略政策を実行し、朝鮮の犠牲の上で強国の仲間入りをしたという、歴史があります。

日本が朝鮮を植民地にした「韓国併合」一九一〇（明治四

三）年の前の年に日本に住んでいた朝鮮人はわずかに八〇〇人たらずでした。それが、一九二〇年日本政府の朝鮮での「産米増殖計画」実施のもと、莫大な量の朝鮮米が日本に積み出されることにより、「農業不振」「生活難」を生み出し、食えないから、日本に來たと朝鮮人が増加した。

日本に住んでいた朝鮮人の数

1910	800
1920	30,189
1930	298,091
1940	1,190,444
1945	2,365,263
2000	635,269

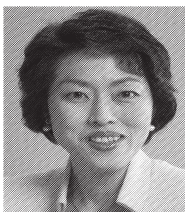
（2000年は登録「定住外国人数」）

一九三七年七月七日「盧溝橋事件」をきっかけに中国との全面戦争に突入。翌一九三

八年陸軍特別志願制度が施行され、朝鮮の青年を戦場に動員するくわだてが実施されました。さらに、一九四〇年「創氏改名」が強制実施されました。これに加えて、日本人の青壮年男子のほとんどが、軍隊にかり出された不足を補う労働力として、集団的に朝鮮から日本に連れて來たなどにより、急激に増加しました。

日本が第二次世界大戦で敗北してから、もう六〇年以上がたちました。にもかかわらず、日本の歴史教科書に対して、韓国・朝鮮や中国などアジアからきびしい批判がたえないのは、なぜでしょうか。

韓国を滅ぼして三六年間も植民地として支配した時代の考え方、また「聖戦」だと言いはった戦争でアジア、太平洋上の島々で二〇〇〇万人もの人たちを犠牲にしたその戦



ともこ
智子

元参議院議員秘書
たむら
田村

争を、いまなお「植民地の解放戦争だった」などと正当化

し、それで日本の子どもたちを教育しようとするれば、被害を受けた国々の人たちがだまつているわけにはいかないのが当然ではありませんか。

にもかかわらず、いまもつてそのようなふるい歴史の見方が日本人の意識にあり、教科書にもなつて登場するのはいったいどうしてなのでしょう。その理由の根本は明治以降の相次ぐ戦争のはてに、一九四五年、第二次世界大戦で敗北したにもかかわらず、国の最高責任者であった天皇がまつたく責任をとらなかつたことにあると言えます。



北朝鮮と日本共産党

日本共産党は、北朝鮮労働党とは、現在、いかなる関係も持っていない。これは、朝鮮労働党からの覇権主義的な干渉と攻撃によるもので、今日の断絶状態にいたるまでには、「キム・イルソン（金日成）主義への追従集団」「自主の会」「キム・イルソン主義研究会」などを育成・組織しての一九七〇年代以来の日本共産党への干渉、八三年のラングーン・テロ事件をめぐる朝鮮総連（在日本朝鮮人総連合会）からの攻撃、八四年の北朝鮮海軍の日本漁船銃撃事件にさいしての朝鮮労働党機関誌「労働新聞」からの攻撃、そしてこれらにたいする日本共産党の側からの反撃、八七年の北朝鮮の工作員による大韓航空機爆破事件とそれをめぐる論争など、一連の経過があ

りました。一九八五年十一月の日本共産党第十七回大会の決議は、この干渉と攻撃の根

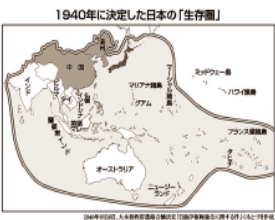
底にある北朝鮮の覇権主義について、次のようにのべています。「覇権主義は、社会主義の大国だけにあらわれる逸脱ではない。『軍事境界線』と日本漁船銃撃事件などの問題で、科学的社会主義の道理も国際法も無視した立場をと

り、自分たちのその立場に同調しないということ、わが党に不当な攻撃をくわえてきた朝鮮労働党の態度は、覇権主義の一つの野蛮な典型である。また、わが党は、自国指導者の名を冠する『主義』や『思想』を世界的な指導思想として礼賛し、あれこれの追従組織を育成して、それをわが国におしつける覇権主義的行為にたいしても、これを断固として拒否する。

太平洋戦争に

乗り出す一年前、一九四〇年九月二十七日の日独伊三国軍事同盟締結を前にして、「皇国ノ大東亜新秩序建設ノ為ノ生存圏」の定義について決定した。

この日本の「生存圏」領土拡張と支配権の範囲を明示すると（二〇〇六・一〇・六衆議院・予算委員会・総括質問志位ハネルから）



1940年に決定した日本の「生存圏」